

## 質問紙法に関する基礎的研究

——心理学的臨床の分野における性格表現用語の検討——\*

続 有 恒 丸 井 文 男 村 瀬 隆 二\*\*  
村 上 英 治\*\*\* 水 山 進 吾† 荻 野 惺††

### I 問 題

質問紙法は心理学における基礎的な方法として広く用いられておりながら、その利用にあたっては必ずしも十分な方法論的吟味がなされていないことがしばしば指摘されている。質問紙法における問題領域は、1つの観点からすれば、質問・応答形式にかかわるもの、語彙・語法にかかわるもの、調査・検査状況にかかわるものに分けることができる。また別の観点からは、性格調査・検査にかかわるもの、意見・態度調査・検査にかかわるもの、知能・学力調査・検査にかかわるもの、等に分けることができる。そして、これらは相互に重なり合っており、質問紙法の種々の問題領域を構成していると考えられる。今日に至るまで、これら諸領域に関する研究の積み上げは未だ決して豊かなものということとはできない。

われわれは、主として性格調査・検査における語彙の問題に焦点づけて、しかも心理学的臨床の分野に領域を限って、検討を進めることを意図したのであるが、そのことは、まず質問紙法において語彙理解のあり方がもっとも基礎的な要件の1つであって、しかもこうした語彙の問題は性格調査・検査の問題領域においてもっとも集約的に示されるものであると考えたからであり、さらには、われわれが、性格像を把握し記述していくことを主たる役割としている心理学的臨床の分野における性格表現のあり方に、それぞれ問題を感じていたからにほかならない。

\* 本研究は、文部省科学研究費（総合研究）による、「質問紙法に関する基礎的研究」（研究代表者 近藤貞次）の一部をなすものであり、この一部はすでに、日本心理学会第30回大会（1966年）において、「心理学的臨床分野における性格表現用語の検討(1)」として報告された。

\*\* 宮城教育大学

\*\*\* 名古屋大学教養部

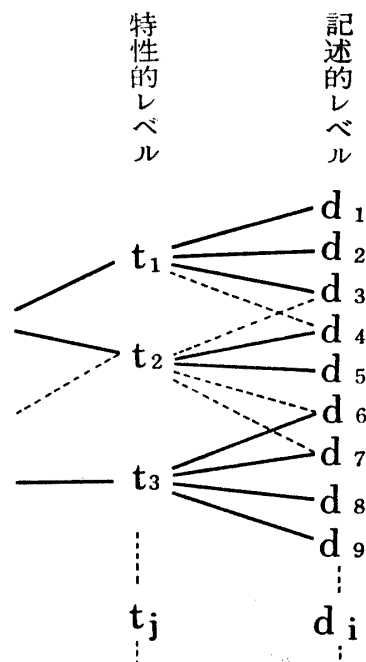
† 名古屋市立保育短期大学

†† 名古屋大学大学院教育学研究科博士課程

性格検査・調査に限って考えてみると、そこにはおよそ次のような語彙理解の問題があると考えられる。まず、検査・調査の成立にあたっての一つの典型的な方法は、その構成を企図した局面に関して、関連すると思われるより具体的・記述的なdレベルの性格表現用語をできるだけ多くあつめて、種々の技法を用いることによって相互の関連を明らかにし、Figure 1で実線として示されるような関係において、特性的レベル、すなわちtレベルにまとめていくことであろう。この方法はインベントリー形式の検査の成立にあたって広く用いられているものということができる。

しかし、ここで一応テスト理論に基づいた信頼性の高い検査が構成されたとしても、その検査がひとりびとりの被検査者に与えられ、そこでとくに、個人個人の性格の理解が目指されたとき、解釈の妥当性との関連において次のような問題が生じてくるであろう。

Figure 1 語彙相互関連



第1の問題は、個々の被検査者が、与えられたdレベルの語彙をどのようなものとして受けとったか、という点である。d<sub>1</sub>, d<sub>2</sub>, …, d<sub>i</sub>等が被検査者それぞれの間で等しい意味に理解されていれば問題は少ないとして、一般に考えられるように、年齢差・地域差・階層差あるいは個人差等による影響があるとすれば、その影響の実際が明らかにされ、取り除かれなくてはならないであろう。あるいは取り除かれなくても、結果の解釈に際して十分な考慮がはらわれなくてはならないであろう。

多くの検査の中には、例えば、被検査者の理解の個人差を利用してその特徴をとらえようとする検査も存在するが、基本的な語彙の理解の差異が結果にあらわれたのか、それとも語彙の理解は共通しているながらその反応に差異がみられたのかの明らかなにされない限りは妥当な個人の理解は困難なものとなる。

第2の問題は、与えられたある被検査者の反応を通じて、そこにどのような性格像を描きあげるかという、検査・調査解釈者の語彙理解の問題である。もちろん、性格像を記述していくことは、単なる語彙理解だけの問題でないことは明らかであるが、語彙に関する問題に限って考えれば、dレベルで与えられた被検査者の反応を、解釈者がどのような意味のものとして理解したか、そこに描き出されてくるものは、どの解釈者においても共通した、しかも妥当性の高いものであるか、といったことに関するものであろう。それはまた、もし検査構成者がFigure 1における実線の関係として各語彙の関係を考えていたとして、彼の用意したt<sub>1</sub>, t<sub>2</sub>, …, t<sub>j</sub>等の特性的レベルの語彙にそのまま対応するものとして、解釈者がそこでのdレベルの反応を理解しているかどうかの問題ともいうことができるであろう。解釈者によっては、点線によって示された関連でt<sub>1</sub>, t<sub>2</sub>等を把握していることも有りうるのである。結局は、検査構成者であれ解釈者であれ、ある対象個人の性格をとらえようとする立場にある者相互の間に、性格調査・検査の中で用いられている語彙について、共通した理解が存在しているかどうかの問題ということができる。

本研究においては、まず第2の問題に焦点づけて検討をすすめることを意図し、次のような予備調査<sup>\*</sup>を行ない、2・3の結果を得た。

\* 名古屋近辺の児相・家裁・鑑別所等の心理判定員・心理調査官5名を対象に、まず具体的な1事例を記述してもらい、その中で「神経質」徴候をあらわすと思われる記述をとりだしてもらった。その後、さらに、その資料をもとに、5名の対象者とわれわれとが集団討議を行なったものである。実施は1965年10月～11月である。

すなわち諸性格検査においてしばしば用いられている特性的な用語のうちから、任意の一語「神経質」を選び出し、数名の臨床・サイコジストを対象に、彼らが「神経質」と判断する場合、どのような記述・表現を手掛りにしているかを、具体的な事例の記述をとおし示してもらい、その後さらにわれわれとの集団討議によって、特性的用語と性格表現の問題を検討し、(1)「神経質」と判断する手掛りとなった記述は臨床・サイコジスト相互に異なり、検査の各項目の記述との対応もかならずしも明確には認められなかった、(2)具体的な記述の中には「神経質」といった静的な特性をあらわす表現と対応づけられるような記述は少なかった、という結果を得たのである。

これらの結果は、第2の問題としてとりあげたような諸検査・調査で実際に用いられている項目の検討を行なう以前に、心理学的臨床の分野において、現実にとどのような性格表現用語が、どのような意味において用いられているか、臨床・サイコジスト相互の間に、性格表現用語自体について、あるいはその意味構造について共通性が存在しているかどうか、共通性の高い語彙はどのようなものであり、共通性の低いものはどのようなものであるか、dレベルとtレベルとの語彙の関連はどのようなものであるか、といった問題の検討の必要性をわれわれに示唆するものであった。これらの問題をまず明らかにしていくことが、上の第2の問題の検討をすすめるにあたって欠くことのできない段階だと考えられたのである。

もちろん、この段階での性格表現用語の共通性の問題は、単に性格検査・調査を通じての性格理解の問題にとどまらず、臨床・サイコジスト相互の間のコミュニケーションにもかかわる問題として、さらには、性格把握の妥当性の問題として展開していく方向をも含むものということができる。

本研究においては、これらの問題の展開の上になつて、臨床・サイコジストの用いる性格表現用語に問題を焦点づけ、対象者を記述する際に実際に用いられている性格表現用語をとりあげ、それが彼ら相互の間においてどれだけの共通性をもって、またどのような意味関連をもって用いられているかを明らかにしようとした。

## II 方法

### 1. 語彙の収集

児童相談所、教育相談施設、病院、家庭裁判所、少年鑑別所、刑務所、大学学生相談室、精薄身障者更生相談

所の8機関についてそれぞれ任意に1カ所を定め、その機関に属して3年以上の臨床経験を有する臨床・サイコロジストを対象に、語彙の抽出を依頼した。各機関毎に、任意に50事例を選び、具体的な事例の記述の中から、その事例の担当者自身の判断に基づいて記述したと思われる部分を取りあげ、その中で性格像を表現していると思われる語彙のすべてを取り出し、記述してもらうよう依頼した(附表1)。最終的に対象となった臨床・サイコロジストは26名、とりあげられた事例数は469であった(Table 1)。

Table 1 語彙抽出の対象

機 関	対象者数	対象事例数
児童相談所	2	50
教育相談施設	2	50
病院	3	53
家庭裁判所	5	50
少年鑑別所	3	50
刑務所	7	70
大学学生相談室	2	46
精薄・身障更生相談所	2	100
計	26	469

## 2. 語彙の選定

上記のようにして各サイコロジスト毎に得られた語彙の中から、われわれの判断において、特性的なレベルを表現していると思われるものを選びだし、もっとも多くサイコロジストに用いられている語彙から順に10位までの10個の特性用語を選びだした。それは依存性、情緒不安定、自己中心性、協調性、神経質、自閉性、劣等感、自己顕示性、衝動性、意欲性の10語である。これに「その他」を加えた11項目が以下の手続において分類のカテゴリーとなった。

同時に、それ以外の語彙の中から、われわれ研究メンバー相互の間で、皆が一致してこれらのカテゴリーには含まれないと判断した語彙を除いて、100語の性格表現の語彙を得た(附表3)。

## 3. 分類および評定法

100語を11のカテゴリーのいずれかに分類することを求め、同時にそれぞれの語彙が「内面的・解釈的」なレベルを表現するものか、あるいは「行動的・記述的」なレベルを表現するものかを、「非常に」、「かなり」、「どちらともいえない」という5段階尺度の評定で求めた。なお、2つ以上のカテゴリーにまたがると判断した場合には、それらをあわせて分類カテゴリーとして並記してもらった上で、どれか1つ、主として属すると思われるカ

テゴリー(主分類)をかならず選んで他(副分類)と区別するよう依頼した(附表2)。

## 4. 調査対象者

語彙の分類及び評定を求めた対象者は、日本臨床心理学会の正会員(3年以上の臨床経験を有する)であって、同時に日本心理学会の会員である189名の臨床・サイコロジストである。

なお、応答総数は115(60.8%)であったが、時間的制約のため、100名の応答が得られたところで資料を集計した。その所属機関別の内訳はTable 2に示したとおりである。

Table 2 所属機関別調査対象者数

所 属 機 関	人 数
a. 病院 関係	30
b. 児童相談 関係	34
c. 矯正 関係	19
d. その他(主として大学関係)	17
計	100

## 5. 調査年月

1966年6月～7月

## III 結果と考察

### 1. 語彙の分類と共通性

100の語彙それぞれを、各々のカテゴリーにどれだけの者が一致して分類したかという比率に基づいて、第Iから第IVまでの4群に分けた。これは、そのまま意味の限定の度合、共通性の段階をあらわすと考えてよいであろう。第I群は、どれか1つのカテゴリーに81%以上の被検査者、すなわち臨床・サイコロジストが一致して分類している語であり、これらの語彙は意味の限定の強い、共通性の高い語彙といえることができるであろう。Table 3に示したように、100語中38語がこの第I群に該当するものであった。

Table 4, Table 5には、第II～IV群に属する語彙を示した。第II群は、どれか1つのカテゴリーに61～80%の者が一致している語彙、19語であり、第I群に比して、その一致率は低い、ある程度の意味の共通性は認められる段階といえることができるであろう。第III群は41～60%の一致する語彙、12語である。II'およびIII'の2群は、上記II, IIIの条件に合致する、主として分類される1つのカテゴリーが存在するだけでなく、ほかのもう1つのカテゴリーにかなり分類の集みがみられる語彙群であり、それぞれ2語と17語とがこれにあたる。III''は、

質問紙法に関する基礎的研究

Table 3

語彙分類一覧

群別	語彙	評定値 (5段階)		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	Y
		平均	SD	依存性	情緒不安定	自己中心性	協調性	神経質	自閉性	劣等感	自己顕示性	衝動性	意欲性	その他
第I群	27 甘えがちな	2.56	1.03	98		2								
	70 独立心のない	3.75	0.90	95									4	1
	19 べたべたした	2.07	0.95	82	1			2			1			14
	58 そわそわしている	1.67	0.76		95			1				2		2
	22 落ち着きのない	1.95	0.85	1	92			2		1		2	1	1
	13 気分むらのある	2.93	1.04		90	1		2			1	6		
	66 注意散漫な	2.11	0.89	1	81	1		2				1	5	9
	86 自己本位の	3.24	1.05			99						1		
	39 自分勝手な	2.40	0.94			95	5							
	2 わがままな	2.48	0.95	1		93	1					4	1	
	57 我をとおしがちな	2.48	0.96			91						8		1
	93 人付き合いのよい	1.91	0.90	1			95		2				1	1
	17 柔軟性のある	3.63	0.83		1	2	88							9
	44 妥協的	2.99	0.94	9			83				3		1	4
	第II群	61 神経過敏な	2.62	1.07		2			97			1		
94 ちょっとしたことが気になりやすい		2.81	1.21		5			94			1			
43 心配性の		3.39	1.04		8			90			1			1
8 物事を苦しみがちな		3.42	0.99		3			89		8				
37 心氣的		3.67	1.08		2			86	2		2	2		6
79 自分のカラにこもった		3.64	1.12			2		97		1				
73 人に会いたがらない		1.87	0.97					1	91	7				1
48 黙りがちな		1.97	0.87					7	82	4				7
42 孤立的		2.63	1.10		1	2	10	2	82	2				1
91 ひがみやすい		3.15	1.02		4	2		2	1	86	3			2
32 見栄をはった		2.48	1.06								100			
56 派手好きな		1.99	0.84		1						98			1
38 気どった		2.18	0.94						1		98			1
62 注意をひきたがる		2.52	1.09		2	1					96		1	
25 虚勢をはりがちな		2.57	1.04		1					14	85			
76 爆発的	2.12	1.11		1						1		97	1	
69 カーッとなりやすい	1.77	0.94		2							1	96	1	
45* 短気な	2.24	1.00		9	3		1					86		
87 短絡的	2.99	1.34		5	1	1					2	82	9	
26 興奮した	1.91	0.87		14			1					82	3	
14 一生けんめいな	2.36	1.07					2						96	2
90 根気のある	2.44	0.93					1					1	94	4
35 向上心の強い	3.41	1.12		1		1				1	3		93	1
78 粘りづよい	2.54	0.95		1		1	1						87	10

\* 無応答が1つある項目を示す。

総 合 研 究

Table 4

語 彙 分 類 一 覧

群 別	語 彙	評 定 値		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	Y
		平均	SD	依 存 性	情 緒 不 安 定	自 己 中 心 性	協 調 性	神 経 質	自 閉 性	劣 等 感	自 己 顕 示 性	衝 動 性	意 欲 性	そ の 他
第 II 群	3 たよらない	3.14	0.96	73	5				1	6	1		7	7
	72 むら気な	2.82	0.99		75	4		1				10	8	2
	41 移り気な	3.63	1.04		68	2	1	1			1	12	10	5
	64 いうことをきかない	1.78	0.93		1	66	18		2		2	1		10
	51 頑固な	2.55	0.95		1	66	8		4	1	8	1	1	10
	82 強情な	2.77	1.09		2	65	8		1		11	1	4	8
	15 温和な	2.81	0.95	1	10		79		1			2	1	6
	84 社交的	2.28	1.04	1			77		3		15		1	3
	97 同情的	3.39	0.98	3		1	67				1		1	27
	23 世話好きな	1.94	0.93	2	1		61		1		13		9	13
第 II 群	100 几帳面な	2.33	0.99					80					4	16
	30 用心深い	3.05	1.06		1	1		66	6	7	1	3		15
	60 打ちとけない	2.69	1.08				4	15	2	76	2			1
	98* 無関心	3.13	0.99				7	2		74			10	6
	95 自己嫌悪的	4.19	0.78		2	1		7	5	78				7
	81 体裁を気にしがちな	2.45	1.02		2	1		15		5	74			3
	1 乱暴な	1.57	0.76		12	2						6	75	5
	53 やる気のない	2.81	1.07	9	3				4	5		1	72	6
	40 怠惰な	2.57	1.00	6	1	6			2	1		1	65	18
	II'	31 赤面がちな	1.99	1.06		7			64	3	22	2	1	
63 おこりっぽい		1.86	0.76		23	3		2		1		70		1

\* 無回答が1つある項目を示す。

註1) 意味共通性の割合による群分類の基準

- I 群……1 カテゴリーが81%以上
- II 群……1 カテゴリーが61%~80%, 他がそれぞれ20%以下
- II' ……1 カテゴリーが61%~80%, 他の1 カテゴリーが21%以上
- III 群……1 カテゴリーが41%~60%, 他がそれぞれ20%以下
- III' ……1 カテゴリーが41%~60%, 他の1 カテゴリーが21%以上
- III'' ……いずれも40%以下で, 2 カテゴリーを合わせると61%以上
- IV 群……上記いずれにも該当せず, 共通性の乏しいもの

註2)

- 50 ……41%以上で, 当該語彙が主として属するカテゴリーを示す
- 30 ……21%以上で, 当該語彙が副次的に属するカテゴリーを示す

質問紙法に関する基礎的研究

Table 5

語彙分類一覽

群別	語彙	評定値		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	Y	
		平均	SD	依存性	情緒不安定	自己中心性	協調性	神経質	自閉性	劣等感	自己顕示性	衝動性	意欲性	その他	
第Ⅲ群	7 内的葛藤の強い	4.73	0.44	59				15	3	18			1	4	
	20 他罰的	3.41	1.23	1	2	58	4			2	13	8		12	
	11* 外罰的	3.40	1.29	1	5	55	2			1	17	8		10	
	10 つめたい	3.47	1.07			10	9	5	55					1	20
	89 拒否的	3.10	1.16		5	19	17		42			2			15
	46 ひねくれた	3.29	1.04		14	10	4	1	3	55					13
21 自虐的	3.88	0.97	2	6	1		11	7	52	3	7			11	
88 支配的	2.88	1.17	2		19	4					48		13	14	
47 軽卒な	2.47	1.00	3	20	1		1			1	56			18	
71 無気力な	3.32	0.98	5	1			7	11	13				60	3	
28 耐久力のない	2.90	1.06	9	18	4		2			1	7		52	7	
18 自信のある	3.25	0.96	3	2	2	4				12	16		44	17	
第Ⅲ'群	34 幼稚な	3.08	0.99	53	2	30					1	1		13	
	36 附和雷同的	2.47	1.07	43	18		7			1		21	1	9	
	52* 小児的	2.55	1.10	42	3	42			1		3			8	
	92 自己弁護的	3.05	1.03	2	4	48		3		16	21			6	
	80 自己主張的	2.68	0.95			46	1			1	45		6	1	
	59 人なつっこい	2.20	0.94	32			53		2		2			11	
	50 従順な	2.55	0.97	40	1		49				1			9	
	99 胸がドキドキしがちな	2.56	1.26		34			57		7		1		1	
	54 ひっこみ思案な	2.81	1.03	5	2		1	11	46	26	1		7	1	
	67 内気な	3.21	1.04	4	2		1	27	44	11	1			10	
	29 なじめない	3.07	1.01			1	23	10	57	4				5	
	68 おずおずした	3.79	0.96	2	24			17	6	48	1			2	
	9 負けずぎらいな	3.01	1.02			8	1			6	57		21	4	
	75 自意識過剰な	3.88	0.95		1	12		21	2	15	45			4	
4 長つづきしない	1.97	0.81	3	36	1		2				3	53	2		
5 あきっぽい	2.37	0.96		36	4		2				5	48	5		
96 あきやすい	2.37	0.89	1	35	1		2			1	9	46	5		
第Ⅲ''群	74 安定した	3.70	0.99		32		34					1	3	30	
	33 カンが強い	2.52	1.11		13	6		39		1	1	30	1	9	
	65 はにかみがちな	2.37	1.05	7	2			34	13	27	5			12	
	83* 逃避的	3.81	0.98	3	4	1	1	2	39	35			4	10	
第Ⅳ群	77 退行的	3.90	1.12	35	11	7			18	8	2		3	16	
	55 落ち着いた	2.72	1.00		34		24					2	3	37	
	24 自制力のある	3.80	0.79	1	7		35	2				21	11	23	
	6 人に好かれない	2.57	1.05		1	26	32		8	2	5			26	
	12* 自棄的	3.56	0.97		16	1		2	5	33		17	7	18	
	49 他人に関心が強い	2.99	1.01	8		1	11	14	4	6	34		5	17	
	16 抑制的	4.01	0.78	1	6		17	17	15	6	1	20	4	13	
85 生氣のない	2.72	1.02	1	2			12	18	12				38	17	

\* 無応答が1つある項目を示す。

いずれも40%以下で、Ⅲの条件をそのまま満たすものではないが、2カテゴリーの一致率を合わせると61%以上になるものであり、その%の高さから、Ⅲに準ずる一致率の高さがあるものと判断された語彙4語である。

第Ⅳ群8語は、上記のいずれにも該当せず、しかも「Y・その他」への分類数が他カテゴリー同様に少ないことからみて、元来意味の限定の弱い、共通性の低い語彙と考えられる。

なお、分類に際して、2つ以上のカテゴリーにまたがると判断した場合は、それらを並記してもらい、さらにその中でもっともあてはまりそうなものを1語、主分類としてとりだしてもらったのであるが、Table 3～5はこの主分類に依ったものであり、それ以外の副分類は附表4～6に示した。副分類を与えることには制限がなく、1人が同一語彙を3～4カテゴリーにまたげて分類することもあったが、その頻数は全体的に少なく、主分類の傾向を大きく変動させるようには思われなかった。むしろ、第Ⅰ群では副分類の数が全体的に少なく、第Ⅲ群では多くみられるというように、上記の主分類による語彙の分類の傾向を裏づけるようなものであった。

## 2. 語彙の表現水準

各語彙がより具体的な、行動的・記述的なレベルを表わすものか、それともより抽象的な内面的・解釈的レベルを表現するかを、5段階評定で求めたのであるが、結果はTable 3～5の評定値欄に示した如くであった。こ

Table 6 語彙表現レベルの評定値\*

評定値**	語彙群	I	II	III	IV	計
1.00～2.99		29	16	15	4	64
3.00～5.00		9	5	18	4	36
計		38	21	33	8	100

\*  $X^2$ 検定で有意差のみられたのは、(I+II):(III+IV), I:III ( $P<.01$ )であった。

\*\* 1:非常に行動的・記述的, 2:かなり行動的・記述的, 3:どちらともいえない, 4:かなり内面的・解釈的, 5:非常に内面的・解釈的

Table 7 語彙表現レベルの評定のSD値\*

SD値**	語彙群	I	II	III	IV	計
1.00以上		18	9	18	5	64
0.99以下		20	12	15	3	36
計		38	21	33	8	100

\*  $X^2$ 検定によって差のみられた項はなかった。

\*\* SD値のRangeは0.44～1.34であった。

れを平均値およびSDについてまとめたのがTable 6およびTable 7である。Ⅰ群とⅢ群の語彙の間、およびⅠ・Ⅱ両群(Ⅱ'を含む)とⅢ・Ⅳ両群(Ⅲ', Ⅲ''を含む)の語彙の間には、その評定値に関して一応有意な差がみられ、Ⅰ・Ⅱ群の語彙はⅢ・Ⅳ群に比してより行動的・記述的であることが認められた。評定値のSDについては明らかではないが、Ⅰ・Ⅱ群がより小、すなわち評定値がより一致する傾向がわずかながらみられた。このことは、明確な、一義的な解釈は困難であるが、行動的・記述的な語彙を用いることによって、性格の理解がより確かなものになることを示唆するものとして考えることができそうである。

## 3. 所属機関による語彙分類の差異

すでに予備調査の段階において臨床的・サイコロジストの所属する機関によって、用いる語彙の異なることが示唆され、語彙収集の段階においても同様の傾向がみられたのであるが、その点に関し、ここでは一致度のあまり高くない、しかも2つのカテゴリーにまたがって分類されたⅡ', Ⅲ', Ⅲ''群に属する23語をとりあげて検討しようとした。これらの語彙をとりあげたのは、もし機関差があるとすれば、これらの語彙にもっとも特徴的にその差異が現われるはずだと考えたからである。

それぞれの語彙について、機関別の差の検定を行なったところ、何らかの形で有意差のみられたのは、23語中6語についてのみであり、その中でも、はっきりとした機関差の認められたのは、わずかに1語だけであった。Table 8にその6語を示したが、「52 小児的」に関して、児童相談関係の機関に所属する者はより「自己中心性」を示すものと考えやすく、矯正関係の機関の者はより「依存性」を示すものと考えやすい、という点が認められた。その他の語彙については、例えば「4 長つづきしない」と「96 あきやすい」とは共に「情緒不安定」と「意欲性」にまたがる語彙であるが、矯正関係の者はより「意欲性」に属するものとしてとりやすいなど、若干の傾向も認められるようである。この結果から、どのカテゴリーが強調されるかという点については不明であるが、矯正関係に所属する者の語彙理解の在り方に、他の諸機関とは異なった構えがあるのではないかと考えられる。しかし、現段階では、全般的に見て、語彙理解の上で機関差がはっきりと現われている、とは言えないようである。

この機関差の問題を別な観点から検討しようとしたのがTable 9である。これはTable 3に示された、第Ⅰ群に属する、限定のはっきりした38語について、個人毎に、主として属するとされたカテゴリーに、その分類が

質問紙法に関する基礎的研究

Table 8 所属機関による語彙分類の差

語 彙	カテゴリー	機 関				小 計	合 計	X <sup>2</sup> 検 定 †			
		a 病 院	b 児 相	c 矯 正	d 其 他			全 体	2 機 関 間		
4 長つづきしない	情緒不安定	12	12	5	7	36	100		c : d*		
	意 欲 性	15	18	14	6	53					
	そ の 他	3	4	0	4	11					
96 あきやすい	情緒不安定	11	11	5	8	35	100		c : d*		
	意 欲 性	12	15	13	6	46					
	そ の 他	7	8	1	3	19					
68 おずおずした	情緒不安定	10	9	1	4	24	100		c : d*		
	劣 等 感	13	17	13	5	48					
	そ の 他	7	8	5	8	28					
99 胸がドキドキしがちな	情緒不安定	15	8	6	5	34	100		a : b*		
	神 経 質	12	22	11	12	57					
	そ の 他	3	4	2	0	9					
52 小 児 的	依 存 性	13	11	13	5	42	99	*	b : c*, c : d*		
	自 己 中 心 性	10	23	3	6	42				**	a : b**, b : c**, b : d*
	そ の 他	7	0	3	5	15					
54 ひっこみ思案な	自 閉 性	12	16	13	5	46	100		c : d*		
	劣 等 感	11	10	2	3	26					
	そ の 他	7	8	4	9	28					

\* P < .05

\*\* P < .01

† 検定に際しては、ある1カテゴリー対残りカテゴリーの合計で計算した。

「52 小児的」では、依存性とそれ以外で5%レベル、自己中心性とそれ以外で1%レベルの有意差があったことを示す。

Table 9 語彙分類の Popularity\*

機 関	一 致 数 [Popularity指数]	38~37 [100~97.4]	36~35 [94.7~92.1]	34~33 [89.5~86.8]	32~31 [84.2~81.6]	30~26 [78.9~68.4]	計
	a 病 院 関 係	7(9)	9(11)	7(6)	4(2)	3(2)	
b 児 童 相 談 関 係	14(16)	8(6)	5(5)	5(5)	2(2)	34	
c 矯 正 関 係	4(7)	8(8)	2(1)	2(2)	3(1)	19	
d その他(主として大学)	5(6)	5(6)	5(3)	1(1)	1(1)	17	
計	30(38)	30(31)	19(15)	12(10)	9(6)	100	

\* Table 3 に示された I 段階に属する38語についての、個人毎の一致数をみたものである。Table中の数値は、上欄一致数に該当する個人の数であり、頻数の( )内は副分類をも合わせた場合の個人の数である。



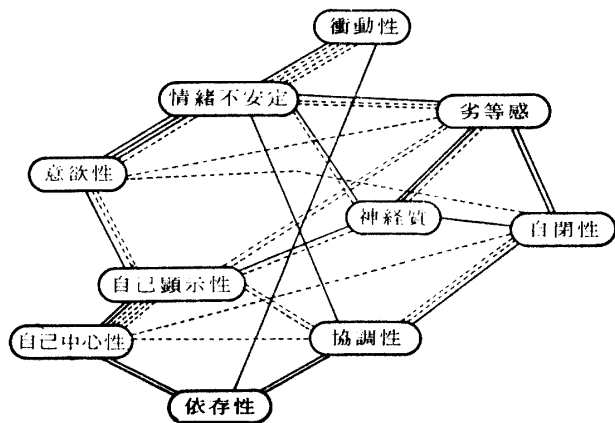
どれだけ一致しているかをみたものであり、ここでは、その一致率を当該個人の Popularity 指数として示した。各機関毎にまとめて示したが、やはり全般的に有意差はみられず、これは副分類による一致をも含めた場合についても同様であった。強いてとりあげれば、児童相談関係の者の Popularity がやや高く、矯正関係がやや低い、という程度であろう。Popularity でみた場合でも、機関差はあまり影響を及ぼさない、ということができるであろう。

#### 4. カテゴリー相互間の関連

上においては、100の語彙にのみ焦点を合わせて検討してきたのであるが、Ⅱ'、Ⅲ'、Ⅲ''の群において、1つの語彙が2つのカテゴリーにまたがって示されるということは、単に語彙自体が2義的であることを示すのみでなく、またがって示されたカテゴリーそのものが、実は互いに意味的に近似していた、と考えることもできるであろう。上記3において機関差が明らかなものとしてはみられなかったことは、この考え方に1つの根拠を与えるものかもしれない。そしてこの考え方に立てば、ある2カテゴリーにまたがる語彙の数が多くなればなるほど、そのカテゴリー相互の意味の近似性は大きくなると考えられるであろう。

Ⅱ'、Ⅲ'、Ⅲ''群に属する23語を主にし、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ群に属してしかも他のいずれかのカテゴリーが11%以上の頻数をもつ語彙を副次的に加えて、そのまたがりカテゴリー間の近似性の指標としてとりあげ、図示したのが

Figure 2 カテゴリー間の相互関連



註) ——— : Ⅱ', Ⅲ', Ⅲ''の段階において、またがりのみられたカテゴリーを示す。結合線の数はいまたがった語彙の頻数をあらわす

----- : Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの段階において、主として分類されたカテゴリー以外で、11%以上の分類がみられた場合の主カテゴリーとのまたがり示す。結合線の数はいまたがった語彙の頻数をあらわす。

Figure 2 である。結合線の意味については図の註に示した。この図において、「情緒不安定」と「自己顕示性」とは共に他のカテゴリーとの結合線が多く、しかもこの2カテゴリー相互の間に結びつきのないことから考えて、上記 Figure 1における t レベルよりもより上位の、より包括的な概念をもった語彙であるとも考えられる。

しかしながら、例えば「情緒不安定」に分類された語彙の中には、評定値が1.67, 1.95といったかなり行動的・記述的なものが含まれており、その点でtよりもより上位にあるとおもわれる語彙が直接d レベルの語彙と結びついていることも考えられ、語彙の相互関連の在り方は一層の検討を要するものと思われる。

その他、図からみられることとしては、「衝動性」・「意欲性」がそれぞれ「情緒不安定」と重なり合う面が多いこと、「意欲性」のあるものは「自己顕示性」としてもとらえられること、「自己顕示性」と「自己中心性」とは重なりあう面が多いこと、「劣等感」「神経質」「自閉性」は相互に重なり合う面を持つこと、「協調性」は「自閉性」の裏の意味として、また「依存性」に近い意味として考えられていること、などであろう。

#### IV 要約と討論

われわれは、質問紙法における性格調査・検査の問題から出発して、その基礎的な研究の一步として、心理学的臨床の分野で用いられている性格表現用語をとりあげ、その共通性の問題を検討するべく、全国の臨床・サイコロジストを対象に、調査研究を進めてきたのであるが、次のような結果を得ることができた。

(1) 臨床・サイコロジストの具体的な性格記述の中から選ばれた100の語彙について、100名の対象者に分類を求めたところ、11カテゴリーへの分類を通じて、意味の限定のはっきりした、共通性の高い語彙として38語が認められた。一部の語彙は、2つもしくはそれ以上のカテゴリーにまたがって分類されており、分類カテゴリーのはっきりしない、共通性に問題のある語彙もみられた。

(2) 語彙の表現レベルに関しては、一応、共通性の高い語は「行動的・記述的」レベルを示すことが多くみられ、その評定値のSDもわずかながら小さくなる傾向がみられた。

(3) 臨床・サイコロジストの所属する機関を、病院・児童相談・矯正・その他(主として大学関係)の4つに分けて、その間の語彙分類のあり方のちがいを検討したが、わずかな語彙を除いてはほとんど差異

はみられず、機関差の影響は極めて少なかった。

(4) 2つのカテゴリーにまたがる語彙を手掛りに、カテゴリー相互の間の関連を検討したところ、「情緒不安定」と「自己顕示性」の2カテゴリーが相互の関連を持たず、しかも他の多くのカテゴリーと結びついており、より包括的な概念として考えられた。その他のカテゴリー相互の関係についても若干の示唆が得られた。

本研究における第1の問題は、ここでとりあげられた100の語彙それぞれが、もともとカルテ等に記載された具体的記述の中から抜き出されたものであって、実際にはそれらが他の表現用語とあわせて、ある文脈の中で用いられていた、という事実と関連するものである。一般的に考えて、例えば Figure 1における $d_3$ という語彙が与えられたとき、ある個人が $t_1$ の流れの中で受けとったか、 $t_2$ の流れで受けとったかということは重要であるが、その際もう1つ、他の $d_1$ か $d_2$ が同時に与えられているとすれば、 $d_3$ は明らかに誰にとっても $t_1$ の流れの中に位置づけられるのであろう。文脈を通しての表現とは、まさにこの $d_3$ に対する $d_1$ 、 $d_2$ を提供しておくことにあり、こうした他の $d_i$ との関連の検討、置かれている文脈との関連の検討を通じて、それぞれの語彙の意味はより限定されたものとなってくるであろう。本研究は $d$ レベルを中心として1つ1つの語彙の特徴を明らかにしようとしたのであるが、上のような観点からの検討をさらに進めなくてはならないことは当然といえるであろう。これは、第I群から第IV群に至るまでの語彙について、その共通性が低ければ低いほど問題となろう。

第2の問題は機関差の検討を通じて出て来た問題である。ここは、さらに2つの問題にわかれるが、その1つ

は、わずかしきみられなかったが、例えば矯正関係についてみられた傾向である。はたしてその領域に独特の表様現式があるのかどうか、未だ今回の検討では資料も不十分であり、今後一層の検討が必要と思われる。

他の1つは Popularity 指数の検討を通じて出てきた問題である。この指数には100から68.4までの開きがあり、機関差としてよりもむしろ個人差の問題として考えねばならない面が存在している。オリエンテーション、臨床訓練、臨床経験との関連において、今後さらに検討してみるべき問題であろう。

第3は、カテゴリーとして用いられた特性的語彙に関する問題である。語彙分類を求めた段階にあっては、それら諸概念について、クリニカル・サイコロジスト相互の間でのくい違いはない、という前提の下で検討を進めてきたのであるが、実はカテゴリー自体が意味の共通性といった問題をすでに含んでいるわけであり、現実には、厳密な意味で独立した領域を持つカテゴリーとして設置することには困難がある。そうしたことから、このカテゴリーに相当するレベルの語彙に関しても、その意味をはっきりさせ、公共性を高めていくことが重要であろう。特にこのレベルの語彙については、単に意味構造のちがいを示してその理解を深めるということだけではなく、専門用語もしくはそれに非常に近いものとして、ある程度意味を限定していかねばならない、ということも起りうるであろう。

**附記** 本研究を進めるにあたって、快く調査にご協力いただいた全国のクリニカル・サイコロジストのかたがたに深く感謝の意を表するとともに、本研究の予備調査の段階において協力を得た三神広子氏にも感謝の意を表するものであります。

## 附表 1

### Q - C - P III

#### 名古屋大学教育心理学教室総合研究C班

あなたが、あるいはあなたと同じ職場に勤務する臨床心理学専攻者が、実際に記録票や少年簿等（いわゆる「カルテ」）に記載しているものの中に、性格像をあらわしていると思われる用語として、どのようなものがあるかを明らかにするために、下記の要項に基づいて、そのような用語のすべてを書きだしていただきたいのです。

#### 要 項

##### (A) 対象事例の選定方法

- (1) 中学生から大学生までの年齢（12才から23才まで）のもの、50名を対象にとりあげてください。

- (2) できるだけ、同じ職場に働いている他の臨床心理学専攻者（経験年数が2年未満の方は除きます）の事例も取りあげてください。その場合、どの方についても、取りあげる事例数ができるべく同数になるようにして下さい（例えば、5人の臨床心理学専攻者の資料を用いるとすれば、1人について10事例ずつ、ということです）。
- (3) その事例について、初回から最終回（又は現在）までの、面接又は治療に関する臨床心理学専攻者による記載事項のすべてが対象となります。

(B) 用語の抽出方法

- (1) 性格像を記述している用語はすべて取りあげてください。ただし、同一事例で同じ用語が用いられている場合は、一度取りあげるだけで結構です。頻数をかぞえることも必要ありません。
- (2) 内容が同じだと思われるものでも、表現が異なるものは、それぞれ独立に、別項目として取りあげてください。
- (3) 性格を直接に示す用語ではなく、日常的に用いるような用語であっても、性格像を記述するために用いられるものであれば、取りあげてください。
- (4) 「カルテ」記載者が、明らかに第3者の供述を引用して記述した、と認められる部分は、取りあげないでください。
- (5) 記載事項の中で、本人以外の者についての記述、例えば両親とか同胞についての性格記述は取りあげないでください。
- (6) 性格記述用語かどうかを決めかねた用語は、取りあげるようにしてください。

(C) 記述方法

- (1) 各事例のカルテ記載者記号・年齢・性別・主訴と診断名等を所定の箇所にご記入下さい。なお、カルテ記載者記号欄には、同じ記載者によるものであることを示す記号（A, B, ……）を御記入下さい。
- (2) 各事例毎に、用いられた性格記述用語を羅列的に書いて下さい。

(D) 参 考 例

これはある児童相談所で扱った事例の結果の一部です。この用語にはあまりとらわれなくて、記述して下さい。

〔カルテ記載者記号〕 A

〔年 令〕 12才6カ月                      〔性 別〕 (♀) 女

〔主訴と診断名（もしついであれば）〕 登校拒否

〔性格記述用語〕

固 い	落ち着きなし	
鈍 い	不安定である	
公共性がない		
ぐずっとしている		
不安感が強い		
自己顕示的である		
意欲に欠ける		

附表 2

回 答 要 領

願ひする回答には分類と評定の二つの手続がございます。

以下の要領によってご回答下さい。

(I) 分 類

- (1) カードに印刷されていることばの一つ一つについて、それが下記のAからJまでの10個の性格特性用語（分類カテゴリー）のどれともっとも関係が深いかをご判定下さい。ここで検討いただくことは、ことばの単なる国語的な意味（語義）ではなく、臨床の実践の場において、そのことばによって表わされ、伝達されようとする意味内容です。もし10個の性格分類カテゴリーのいずれにも関係がないと思われる場合は、「Y. その他」に分類して下さい。

〔分類カテゴリー〕

- |          |        |          |        |
|----------|--------|----------|--------|
| A. 依存性   | D. 協調性 | G. 劣等感   | J. 意欲性 |
| B. 情緒不安定 | E. 神経質 | H. 自己顕示性 | Y. その他 |
| C. 自己中心性 | F. 自閉性 | I. 衝動性   |        |

- (2) 分類が終了しましたら、それぞれのカテゴリー欄に、その該当するカテゴリーの記号をご記入下さい。
- (3) 同一のことばが2つ以上のカテゴリーにまたがって、いずれとも決めがたい場合は、あてはまるカテゴリー記号のすべてを欄内にご記入下さい。ただし、その場合、それら当該カテゴリーのうちで、しいて考えればもっとも関係が深そうだとと思われるカテゴリーの記号に○印を付して下さい。
- (4) 分類カテゴリーのY、および2つ以上にまたがった分類はできるだけ少なくなるようお願いいたします。

(II) 評 定

- (1) それぞれのことばが、人間の行動や態度などに関して、内面的、解釈的なレベルを表現するものとして用いられることが多いか、それとも具体的な、行動的、記述的なレベルを表現するものとして用いられることが多いかという次元で、カードに記された5段階尺度のどの位置にあてはまるかを評定して下さい。

評定は、あてはまる位置の数字に○をつけて下さい。

- (2) この評定は、Yに分類されたカードをも含めて、すべてのカードについてご記入下さい。
- (3) それぞれのことばは、使い方によって若干レベルが異なってくることもありますが、もっとも多く用いられるレベル、ということでお考え下さい。

(III) そ の 他

- (1) 下記のカード見本、記入例にならってご記入下さい。
- (2) カードの下部〔 〕には、上記(I)(II)の各手続の途中で疑問をお感じになった点を、自由にご記入下さい。
- (3) 分類カテゴリーをそれぞれ印刷した封筒を同封いたしましたので、机の上にもならべて分類していただければと思います。

(4) すべてご記入いただきましたら、カード数(100枚)をご確認の上同封返信用封筒でご返送願います。

以上よろしくお願ひ申し上げます。

[カード記入例]

103. つめをかむ	No.				
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 10px auto;">                 カテゴリー                  ⑤ B             </div>	非常に 内面的 5	かなり 内面的 4	どちら いえない 3	かなり 行動的 2	非常に 行動的 ①
{					

附表 3

調 査 語 彙 一 覧

- |              |              |               |                      |
|--------------|--------------|---------------|----------------------|
| 1. 乱暴な       | 26. 興奮した     | 51. 頑固な       | 76. 爆発的              |
| 2. わがままな     | 27. 甘えがちな    | 52. 小児的       | 77. 退行的              |
| 3. たよらない     | 28. 耐久力のない   | 53. やる気のない    | 78. 粘りづよい            |
| 4. 長つづきしない   | 29. なじめない    | 54. ひっこみ思案な   | 79. 自分のカラにこもった       |
| 5. あきっぽい     | 30. 用心深い     | 55. 落ち着いた     | 80. 自己主張的            |
| 6. 人に好かれない   | 31. 赤面がちな    | 56. 派手好きな     | 81. 体裁を気にしがちな        |
| 7. 内的葛藤の強い   | 32. 見栄をはった   | 57. 我をとおしがちな  | 82. 強情な              |
| 8. 物事を苦にしがちな | 33. カンが強い    | 58. そわそわしている  | 83. 逃避的              |
| 9. 負けずぎらいな   | 34. 幼稚な      | 59. 人なつっこい    | 84. 社交的              |
| 10. つめたい     | 35. 向上心の強い   | 60. 打ちとけない    | 85. 生氣のない            |
| 11. 外罰的      | 36. 附和雷同的    | 61. 神経過敏な     | 86. 自己本位の            |
| 12. 自棄的      | 37. 心氣的      | 62. 注意をひきたがる  | 87. 短絡的              |
| 13. 気分むらのある  | 38. きどった     | 63. おこりっぽい    | 88. 支配的              |
| 14. 一生けんめいな  | 39. 自分勝手な    | 64. いうことをきかない | 89. 拒否的              |
| 15. 温和な      | 40. 怠惰な      | 65. はにかみがちな   | 90. 根気のある            |
| 16. 抑制的      | 41. 移り気な     | 66. 注意散漫な     | 91. ひがみやすい           |
| 17. 柔軟性のある   | 42. 孤立的      | 67. 内気な       | 92. 自己弁護的            |
| 18. 自信のある    | 43. 心配性の     | 68. おずおずした    | 93. 人付き合いのよい         |
| 19. べたべたした   | 44. 妥協的      | 69. カーッとなりやすい | 94. チョットしたことが気になりやすい |
| 20. 他罰的      | 45. 短気な      | 70. 独立心のない    | 95. 自己嫌悪的            |
| 21. 自虐的      | 46. ひねくれた    | 71. 無気力な      | 96. あきやすい            |
| 22. 落着きのない   | 47. 軽卒な      | 72. むら気な      | 97. 同情的              |
| 23. 世話好きな    | 48. 黙りがちな    | 73. 人に会いたがらない | 98. 無関心              |
| 24. 自制力のある   | 49. 他人に関心が強い | 74. 安定した      | 99. 胸がドキドキしがちな       |
| 25. 虚勢をはりがちな | 50. 従順な      | 75. 自意識過剰な    | 100. 几帳面な            |

質問紙法に関する基礎的研究

附表 4

副 分 類 一 覧\*

群 別	語 彙	A 依 存 性	B 情 緒 不 安 定	C 自 己 中 心 性	D 協 調 性	E 神 經 質	F 自 閉 性	G 劣 等 感	H 自 己 顕 示 性	I 衝 動 性	J 意 欲 性	Y そ の 他
第 I 群	27 甘えかちな	0	1	1				1	2			
	70 独立心のない	0		1				3			1	
	19 べたべたした	1	2	2					2			
	58 そわそわしている		0			4				1		
	22 落ち着きのない		2	1		6		1		5		
	13 気分むらのある		3	2		3			1	4		
	66 注意散漫な		3			1				6		
	86 自己本位の			0					2	1	1	
	39 自分勝手な		1	0	1				7			
	2 わがままな	3	2	1	2				2	1		
	57 我をとおしがちな	1		4	5		1		9	1	2	
	93 人付き合いのよい				1		1		1			
	17 柔軟性のある				1						1	
	44 妥協的	8		1	2							
	I 群	61 神経過敏な		5			0	1	1	1	1	
94 ちょっとしたことが気になりやすい			6			1		3				
43 心配性の		2	7			2	1	6	1			
8 物事を苦ししがちな		1	4			5		5				
37 心氣的			6			0	3	2				
79 自分のカラにこもった			1	3	1	1	0	4				
73 人に会いたがらない			2		1		1	7	1			
48 黙りがちな						3	2	7				
42 孤立的		1	1	3	1		4	8				
91 ひがみやすい			5	3	1	3	2	0		1		
群	32 見栄をはった		1	1				5	0			
	56 派手好きな				1			2	0			
	38 気どった			4					0			
	62 注意をひきたがる		1	2				4	2			
	25 虚勢をはりがちな		3	1				6	2	1		
	76 爆発的		3	1				2	1	1		
	69 カーッとなりやすい		5	3				2		2		
	45 短気な		4	5		1			3	5		
	87 短絡的		3	2				1		1		
	26 興奮した		10	1					1	3	1	
群	14 一生けんめいな								1		2	
	90 根気のある		1		1						0	
	35 向上心の強い	1			1				3		2	
	78 粘りづよい									1	2	1

\* 各indexについては本文 Table 3~5 の註を参照のこと。  
表中の数字は、そのカテゴリーに副次的に分類した個人の数を示す。

附表 5

副 分 類 一 覧

群 別	語 彙	A 依 存 性	B 情 緒 不 安 定	C 自 己 中 心 性	D 協 調 性	E 神 經 質	F 自 閉 性	G 劣 等 感	H 自 己 顯 示 性	I 衝 動 性	J 意 欲 性	Y そ の 他
第 II 群	3 たよらない	1	3			2	3	6			2	1
	72 むら気な		4	1		1	1		1	7		
	41 移り気な		4	2					1	4	4	
	64 いうことをきかない	1	1	4	2			1	3			
	51 頑固な		1	6		1	7	2	3	2	1	
	82 強情な			4		1	2	2	2			1
	15 温和な	3			0	2	1					1
	84 社交的	1			4				7		1	
	97 同情的				1							
	23 世話好きな	1			5		1		8		4	
第 II 群	100 几帳面な					2					1	
	30 用心深い			1	1	1	3	2				
	60 打ちとけない			2	2	2	1	4				
	98 無関心			4			1				1	
	95 自己嫌悪的		4	1		6	3	1	1			
	81 体裁を気にしがちな		3			8		8	3			
	1 乱暴な		7	3					1	7	1	
	53 やる気のない	2	2	1			1	4			1	2
	40 怠惰な			2			1	1			1	
	第 II 群	31 赤面がちな		4			10	2	<u>7</u>	1		
63 おこりっぽい			<u>9</u>	1		1		2	1	9		

質問紙法に関する基礎的研究

附表 6

副 分 類 一 覧

群別	語彙	A 依存性	B 情緒不安定	C 自己中心性	D 協調性	E 神経質	F 自閉性	G 劣等感	H 自己顕示性	I 衝動性	J 意欲性	Y その他
第Ⅲ群	7 内的葛藤の強い		3			8	1	8	1			
	20 他罰的 11 外罰的		3	5	1			2	2	2		2
	10 つめたい 89 拒否的			4	1	2	2	1				1
	46 ひねくれた 21 自虐的		2	4	2		4	3	2			
	88 支配的		3			5	4	4	1	2		2
	47 軽卒な		3		8				8	1	3	
	71 無気力な 28 耐久力のない 13 自信のある	3	1			3	4	5			0	1
	34 幼稚な 36 附和雷同的 52 小児的 92 自己弁護的 80 自己主張的 59 人なつっこい 50 従順な 99 胸がドキドキしがちな 54 ひっこみ思案な 67 内気な 29 なじめない 68 おずおずした 9 負けずぎらいな 75 自意識過剰な 4 長つづきしない 5 あきっぽい 96 あきやすい	3	2	2		4		2		1	1	1
	7	1	<u>9</u>				1	1	1	2		1
	2	6		4			4	1	<u>3</u>			
9		10				1	1	2	<u>6</u>		1	
	1	3			1	1	4	<u>4</u>			1	
1		15					1	<u>14</u>		4		
<u>3</u>			7					2			1	
<u>9</u>	1		8		1	1	2					
	<u>6</u>				10		4					
	<u>1</u>				3	3	<u>12</u>	1			1	
3	2	1	1	<u>7</u>	7	11					1	
		1	<u>2</u>	6	5	1					1	
1	<u>4</u>			7	2	7	1					
	<u>1</u>	6	1	1		6	8	1	<u>7</u>			
	3	3		<u>4</u>	1	5	6		<u>1</u>			
1	<u>4</u>			1		2		6	2	1		
	<u>5</u>			2			1	4	4	1		
1	<u>6</u>			2			1	1	4			
第Ⅲ''群	74 安定した 33 カンが強い 65 はにかみがちな 83 逃避的		<u>1</u>		<u>4</u>			1		2		6
			6	2		<u>2</u>		1	<u>3</u>			
		4	2			<u>5</u>	4	<u>5</u>	2		1	1
			2			4	<u>3</u>	<u>6</u>		1		
第Ⅳ群	77 退行的 55 落ち着いた 24 自制力のある 6 人に好かれたい 12 自棄的 49 他人に関心が強い 16 抑制的 85 生気のない	<u>4</u>	4	5		1	3	2	1	3		1
		<u>0</u>		<u>2</u>							1	2
				<u>2</u>	1		1		<u>0</u>	2	2	
		1	<u>2</u>	<u>3</u>	2	2	1	1	<u>3</u>			
		3	3	1	1	4	1	<u>7</u>	6		1	
		3	3	1	1	4	1	8	<u>7</u>			2
			1		2	2	3	6			1	1
		2	1			5	7	5		<u>1</u>		2